



著者プロフィール: 日本を代表するフラメンコギタリスト。幼少の頃よりヴァイオリンを始め、その後ギターを独習。A-JARIやチリクマルカ等のグループ活動を経て、明治大学在学中にフラメンコギターを始める。98年から長期渡西。マドリードのタブラオ「カサ・パタス」やセビージャのラジオ番組などに出演。帰国後はカニサレスとの共演やNHK「音楽のある街で」出演。主な参加CD・DVD: 風回廊(渡辺えり)、天国を見た男(沢田研二)、Boy(coba)他。Estudio ROMERO主宰。

VOL.10

BULERÍAS ②

～はじめに～ 今回はフィン・デ・フィエスタでのブレリアを取り上げます。楽しいフィン・デ・フィエスタですが、その作法を知れば更に楽しむことができます。同じ空間を皆で楽しむためのヒントにしてください。

ブレリアの醍醐味

ブレリアというとなぜ何を思い浮かべますか？ ある人はコンパスやリズムだったり、ある人は底抜けに明るいメロディーなどさまざまだと思います。ブレリア同様、ソレアやアレグリアスも曲名ではなく曲種名ですが、イメージは各人においてさほど変わらないのではないのでしょうか。ブレリアは小気味良いそのコンパスやリズムだけでも表現できます。また、フラメンコ風の旋律(ミの旋法)だけでなく、明るいメロディーや暗いメロディーも存在します。調性やコンパスなどは先月説明しましたが、その詩型やテンポなども伴って即興性が非常に高いこともブレリアのもつ魅力です。歌、ギター、踊りがそれぞれの個性で即興的に時にはぶつかり合い、時には融合し合いながら進んでいきます。その駆け引きの中にブレリアの醍醐味があります。

フィン・デ・フィエスタ

タブラオのショーや舞台・ライブなどの演目がすべて終わったあと、おもむろに始まるフィン・デ・フィエスタを見たことのある人は多いと思います。フィン・デ・フィエスタ(fin de fiesta)とは出演者全員で唄い踊られるショーの締めくくりのようなものです。私がフラメンコを始めた頃はルンバやタンゴが多かったように思いますが、今は圧倒的にブレリアをやる人が多いです。即興性の強いブレリアは、その空間を皆で共有しながら楽しむことができます。まさにブレリアはフィン・デ・フィエスタにうってつけと言っていいでしょう。2009年7月号の本誌パセオにも詳しく書いておりますので、参考にしてください。

唄と踊りの関係

フィン・デ・フィエスタのブレリアをより楽しんで、気持ちよく踊るためには、唄との関係が重要です。唄い手は踊りを見ながら唄っているので、踊り手は何をしたいのか、はっきり意思表示(インテンション)する必要があります。唄に耳を傾けることと自分を表現することは、つねに同時進行。唄を聞きすぎたために動けないまま終わり、踊れなくなってしまうことがあるので注意してください。フィン・デ・フィエスタには絶対のルールはありませんが、その基本的な構造を確認しましょう。

踊りと唄の構成

1行目 → レマーテ → 1行目 → 2行目 → 3行目 → 2行目 → 3行目

ブレリアはテンポも速くメディオコンパス(6拍)も多いので、唄のコンパス数は決められませんが、仮に1行を1コンパスで唄うとすると、上記の場合は全部で7コンパスになります。1行目と3行目の終わりが唄のメロディーの落ちどころ(カイエダ)で、2回目の2行目が「唄い返し」部分となります。

踊りの構成

ウナ・パタイータ + ジャマーダ + ハケ(シメ。踊り終えて元の場所に戻る)

- ①踊り出す時に踊り手がジャマーダをして唄を呼び込む
- ②唄の間はマルカールでコンパスを刻む
- ③唄が終わったらジャマーダや足(サパテアード)をしてハケ唄をもらって元の場所に戻る(唄い返しの部分でジャマーダの振りや足を入れても効果的です)

※pataitaとは、pata(足)の意味。つまり、ひと踊りということなので、それ以上長いとスペイン人たちからペサオ(しつこい)と言われるので注意が必要です。

上記の踊りの構成はあくまでも参考例です。その場の雰囲気や唄を大切にしてください。あらかじめたくさんの方が踊るとわかっている時は、ハケ唄をもらわずに次の人が踊り始める方が流れがよくなる場合もあります。

土地ごとの違い

セビージャやマドリードなどの大都市では、ブレリアもタブラオなどで観客に見せることで発展して行った一面もあり、ショー的観点からも踊り手がジャマーダをかけて唄を呼ぶスタイルが定着して来たと考えられます。元来自分たちが楽しむためのフィエスタでは、最初から唄を唄っている場合が多いので、唄の最中に踊りが入っていかなくてはなりません。踊り出すタイミングはどこでもいいのですが、唄のメロディーの落ちどころや唄い返し部分を探すと分かりやすいでしょう。唄の盛んなヘレスの場合では、踊り終わるまで途切れなく唄い続けるのが一般的です。唄の終わりを待たずに、良いころ合いで踊り手の方から曲を終わらせることも大切です。

大都市(セビージャやマドリードなど)

踊り先行でジャマーダ + 唄(マルカール) + 足(ジャマーダ) + シメ(ハケ)唄

※足(ジャマーダ)は、唄がすべて終わるまで待つか、唄い返し部分から入れても効果的。

ヘレスなど

唄先行で好きな時に踊りが入る + 踊り終わるまでシメ(ハケ)唄を唄い続ける

※唄の旋律の落ちどころをめがけると踊り出しやすい。

特にフィン・デ・フィエスタの場合は、その場の雰囲気や唄の特徴に合った踊り方が大切です。振り付けをなぞるのではなく、その場を楽しんでください。今回はファンダンゴ・デ・ウエルバを取り上げます。

音源は片桐勝彦 HP で聴けます！ URL <http://www.toshima.ne.jp/~kata/katsu>
同内容のバルマクラス、スタジオロメロで開催中。1月13,27日、20:40～終電ぐらいまで